

## 第1章 移民状況の中の「歌」の記憶

— 1930-40年代の植民地教育の現場から —

稲賀 繁美

## 1. 滅び行く幼少の記憶

- |   |   |
|---|---|
| 一. あまてる神の宮居のほとり<br>朝夕に仕へまつりて                              | 丘べの森に立てる <sup>まろびつ</sup> 学園<br>垣のうちなる我らが <sup>まろ</sup> 幸              |
| 二. 蒼空遠くそそりて崇し<br>荒ぶ朔風も雄しく耐へて                              | 白頭み山の動かぬすがた<br>強き <sup>みくに</sup> 皇国の乙女とならむ                            |
| 三. 深碧に映ゆる <sup>あつ</sup> 図們的流れ<br>修めて撓まず <sup>あ</sup> 嗜み香る | 大海めざし <sup>あ</sup> 夜昼を <sup>あ</sup> 舍かぬ<br>床しき <sup>あ</sup> 協和の乙女とならむ |
| 四. 明るき心望は遙か<br>皇国の栄に己をすてて                                 | いざや進まむ <sup>あ</sup> 一路の彼方<br>我等 <sup>あ</sup> 興亜の乙女とならむ                |

上に掲げた詩句から、読者にはどれだけの情報が汲めるだろうか。一読、校歌の歌詞と判別がつく。「皇国」や「興亜」さらに「協和」といった言葉遣いから、日本が戦前期に入植地とし、ついで中国でいえば「偽滿洲國」を樹立した地域に関連することも読み取れよう。さらに「白頭山」「図們的流れ」からは地域が特定されよう。ともに現在でいえば、中国北東端、延辺朝鮮自治区にまつわる地名。「白頭山」は中国名では現在「長白山」と呼ばれるカルデラ湖を湛えた景勝の地であり、中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国との国境線が、海拔2190メートルに位置する天池の中央を走っている。白頭山一帯を水源のひとつとする<sup>とまんこう</sup>図們江は北東に沿って流れ、その兩岸で中朝国境が隔てられるが、源流より200キロほど下った<sup>あ</sup>図們市の下流で大きく東へ回頭し、日本海に注いでいる。河口30キロほどの地域では、中国の版土は、北はロシア、南は北朝鮮に挟まれ、まるで犬の尻尾のように、<sup>あ</sup>図們江左岸にそって細々と延長されるが、河口まであと15キロのところ、ふと途切れる。その先、目視

出来る距離に、ロシアと北朝鮮の物資輸送を確保する鉄道橋が河を跨いでいる。19世紀以来、南下の趨勢を強める帝政ロシアに対し、清朝はうかつな譲歩により領土を割譲してきた。1886年の琿春議定書では、かろうじて河口までの航行権をロシアに認めさせた。だが中国はその後も、日本海への唯一の出口を確保できないまま、今日に至っている。「大海めざし」と綴った作詞者は、そうした歴史を知悉していたのだろうか。

冒頭の歌詞は「龍井女子国民高等学校校歌」として「康徳十一年一月十四日」に成った。「作詞・作曲 稲賀襄」とある<sup>1)</sup>。襄は筆者の祖父に当たる人物だが、1944（昭和19）年に相当するこの年、当時の「間島省・龍井」に同校校長として赴任していた。あらたな校歌が必要となったについては、学制の変更にもなって、それまで存在した光明女学校ほかを統合する事業が進められていた、という背景がある。当時の在校生で現在まだ健在の方があれば、そろそろ80歳を迎える勘定となる。昨年、縁あって延吉大学に招かれた。そのおり現地で問い合わせさせていただいたところ、早々におふたりの老婦人に面会が叶った<sup>2)</sup>。そのうちのおひとり、Kさんは、かつて北京放送局で日本向けの放送に携わっておられた経歴もあり、現在も日本語が達者で、歌詞をご覧になるや、さっそく節を付けて、高等女学校校歌を歌ってくださった。襄は、1944年11月12日、高等女学校退任当日の最後の朝礼の直前に<sup>あ</sup>宿舎の庭で倒れ、その場で急逝した。おふたりは現役のまま没した「背の高い日本人校長」を、はるか昔の記憶に留めておられた。だが、その襄（1893-1944）の遺品のなかには、歌詞こそ遺されていたものの、楽譜はついに再発見できないままだった。その幻の曲が、高等教育を受けた朝鮮族の老婦人の口から、65年振りに再生されたことになる。

所詮は広島高等師範学校で国漢を修め、趣味に音楽を<sup>あ</sup>囁いた程度の襄による作詞・作曲の校歌に、どれほどの音楽史的な価値があるわけでもない。おどかな、いかにものんびりとした曲である。歌詞にしたところで、当時の政治情勢下で、皇国教育に必須の語彙に、地方色を反映させる地名を混ぜて散りばめ、そこに大正デモクラシーの雰囲気<sup>あ</sup>を吸って育った教育者<sup>あ</sup>の信念を、許容範囲内で溶け込ました、といった程度の出来だろう。偽滿洲國全体をみれば、同様の作詞・作曲の類例は枚挙に暇があるまい。それらの歌詞を細かに比べれば、日本人比率の高い学校と、中国人、満洲人あるいは朝鮮系入植者が大多数を占

める学校とで、民族教育の次元に多少の違いは見られるかもしれない。校長がどの程度国策に忠実だったか、そこから逸脱していたかも計測可能だろう。さらに男子教育と女子教育とで、理念の重点に微少な差を見いだすことも、不可能ではないだろう。だがいずれにせよ、これらの歌詞や校歌は、長くても10数年、短ければほんの1年半ほど使われただけで破棄され、その後半世紀以上にわたって公教育はおろか、歴史のうえからも存在を認知されず抹殺され、記憶の中でも封印され、あと数年で生き証人がこの世を去るとともに、永遠に失われ行く運命の、儂い断片、「偽」満洲國の禁じられた表象に過ぎまい。

とはいえ、この取るに足らない遺物からも、逆に、日本支配時代の教育を通じた刷り込みの実態が、仄かに浮かび上がってくる。そこにはさまざまな局面が宿っているだろう。まず、異文化受容としての音楽教育という観点から見れば、ここには皇国教育を「五族協和」という（孫文の中華民国の理念を置換した）スローガンに焼き直し、「協和」思想によって中国大陸東北部に根付かせようとした、日本帝国による壮大なる異文化教育実験の、失敗の痕跡が見いだされる。だがふたつめに、それをただ失敗と片づけるには、いささか厄介な事態も垣間見える。事は青春期の音楽教育が記憶に果たす役割に関わる。周知のとおり、とりわけ文化大革命期には、戦前、日本との繋がりをもっていた知識人階級には容赦ない弾圧が加えられた。辛くも生き延びた人々のなかにも、自己洗脳によって、戦前の記憶を喪失した例が少なくない。旧「満洲」出身の人々にとって、これはおよそ他人事ではない。だが、そうした歴史の試練にも拘わらず、齢十代の後半までに教育によって仕込まれた知識、とりわけ音楽を媒介として植え付けられた語句は、イデオロギーの如何を問わず、人の大脳皮質の深部に、否応なく明確な記憶の刻印を残し、それは生涯消し去り難い。とりわけ朝鮮系人口が過半を占める旧間島地域にあって、事は複雑となる。

## 2. 国民歌謡と移民問題

名も知らぬ遠き島より、流れ寄る椰子の実ひとつ  
 故郷の岸を離れて 汝はそも 波に幾月  
 旧の木は 生いや茂れる 枝はなお 影をやなせる

012

われもまた 渚を枕 孤身の 浮寝の旅ぞ  
 実をとりて 胸にあつれば 新なり 流離の憂  
 海の日 沈むを見れば 激り落つ 異郷の涙  
 思いやる 八重の汐々 いずれの日にか 国に帰らん

島崎藤村(1872-1943)が、生涯最後の海外旅行に旅立ったのは、1936年、アルゼンチンのブエノス・アイレスで開催される国際ペン・クラブ総会に日本代表として出席するためであった。その同じ昭和11年に、藤村1901年の旧作「椰子の実」(『落梅集』明治34年所収)の詩に作曲家の大中寅二が、曲を付けた。歌曲は東海林太郎がNHKラジオで歌って、全国に広まった。柳田国男の証言を信ずるならば、元来は伊良子の岸で柳田が発見した椰子の実の物語が、藤村に詩興を催さしめたものとされる。だが、この人口に膾炙した歌曲は、南米への旅の行程で、元来の射程を遙かに上廻る寸法を獲得することとなる。それは、おそらくは藤村自身、予期していない出来事だった。

ペン・クラブ大会に続き、藤村はブラジルを訪れている。サン・パウロ州を中心として、1908年以来日本人移民が公式に入植を開始しており、当時移民総数は18万人を越え、子弟を含めれば25万人と推定される日系人口を数えていた。藤村は大坂商船、りお・で・じゃねいろ丸に神戸より乗船し、インド洋経由、大西洋を越える航路で南米に赴いたが、この貨客船は移民船でもあり、850名を数える一行のなかには、今回初めとなるパラグアイ入植者8家族も混じっていた。「故郷の岸を離れて 汝はそも 波に幾月」とは、もはや東海の渚に流れ着いた椰子の実に託す、幼げな文学的感傷などではなく、二度と再び祖国を見る当てもないまま移民船で地球の裏側へと輸送される移民たちの、現実の境遇に他ならなかった。出港に先立ち、藤村は妻とともに松尾芭蕉終焉の地、大阪は久太郎町の花屋跡に詣で、石碑に草百合、撫子、桔梗などを手向けている。句碑に刻まれていたのは、ほかならぬ、芭蕉の辞世として世に知られる一句、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」であった。この句もまた、南米航路の途上であらたな意味を孕んでゆく。藤村は、船中で病を得て死んでいった幼子の水葬にも立ち会う。その子の魂は、まさしく「旅に病んで夢は」二度と見ぬ故郷を「かけめぐる」ものだったに違いない<sup>3)</sup>。

013

「実をとりて 胸にあつれば 新なり 流離の憂」。サン・パウロのあと、藤村はリオ・デ・ジャネイロを訪ね、フラメンゴ海岸に面したグロリア・ホテルに投宿している。そこから遠からぬ植物園は、中央に高さ30メートルを越す帝王椰子の並木のあることで知られる。藤村は旅先の南米で椰子と再会することとなったわけである。それに先立つサン・パウロでは、藤村は郊外に足を伸ばし、親友の芭蕉研究者、太田瑞穂の親戚筋にあたり、藤村とも同郷の信州出身の入植者、指旗深志夫妻を訪ねていた。当時、信州からだけでも4,000名を越える入植者があったといわれるが、その信州出身者でブラジルにおける和歌運動の一つの中心となった人物に、岩波菊治が知られる。菊治は1938年に歌誌『椰子樹』を創刊するが、この誌名がブラジルの風土植生に由来するだけでなく、藤村の「椰子の実」の影と響きのなかに発芽したことは、もはやいうまでもないだろう。すでに1936年には、日本経由で国民歌謡としての「椰子の実」のレコードがブラジルに到着し、日系人のあいだで流行をみたことが記録からも確認できる。

「海の日 沈むを見れば 激り落つ 異郷の涙」。そう歌っても、東岸を大西洋に向けたブラジルでは、海に沈む日を眼にすることは、容易ではない。だがそれがかえって大陸の山の彼方に没する太陽の方角の、さらに彼方に位置する日本の遠さを、心に焼き付ける。「思いやる 八重の汐々 いずれの日にか国に帰らん」。最初期の入植者は、一攫千金の夢を果たせば、すぐにでも帰国する心づもりで、いわば出稼ぎ気分で入植したという。だが30年代半ばまでには、それが現実からはほど遠い夢に過ぎないことが納得されるようになっていた。いったん入植すれば、家族をブラジル国民として養育し、ブラジル社会でそれなりの地位を占めてゆかねば、移民としての栄達のあり得ないことにも、日系家族は気づき始める。こうして、邦人小学校では「和魂伯才」式の教育の必要が痛感されるようになっていた。

ここで、当時のブラジルにおける日本移民の教育状況をざっと概観しよう。藤村来訪よりは5年ほど早い統計になるが、1931年現在で、サン・パウロ州内の「邦人小学校」は185校を数えており、それが、39年には486校に達する。サン・パウロ州だけでも、日本列島から北海道を省いたのに匹敵する面積を有している。従って施設規模の大小や地域差などを考慮に入れねばならないが、

ごく一般的に言えば、午前中は日本の国定教科書を利用して、国語、修身、算術、理科、体操に加え、唱歌が日本語によって教育され、午後にはサン・パウロ州教育令に従い、ポルトガル語による公教育が併行して実施された、という。38年前後の日系側の報告では、これら両方の教育方法が現場で軋轢を生み、日伯両語の教師に反目を来す事例もあったことが知られる。

南米からの帰国後の藤村は、その報告となる『巡礼』で、海外在住の日本子女に適切な日本語の読み物を提供する必要のあることを説いている。昭和15年から刊行が開始された『藤村童話叢書』に、藤村は晩年の文学的熱意を注いでいる。昭和15年12月刊行の新日本少年少女文庫第15巻には、藤村選の『西洋文学選』が知られ、そこにはインドからはタゴール、北米からフランクリン自伝やアンヌ・モロー・リンドバーグの日本体験記も含まれている。さらに『新作少年文学選』（昭和17年）の末尾でも、藤村は先立つ南米旅行の経験に触れている。白人社会であるアルゼンチンではなく、むしろブラジルでの日系社会の教育の現状に接したことが、藤村をして、これらの事業に向かわせるうえで、なんらかの影響を及ぼした、と仮定することは許されよう<sup>4)</sup>。

とはいえ、現実の世界情勢とはいえば、藤村のこうした「善意」など通用しない状況を迎えていた。先に38年にはブラジルの教育現場で日本語とポルトガル語使用に関して軋轢があったことを示唆したが、実はその背景には、それに先立つ37年にヴァルガス政権が導入した「新体制」があった。「新体制」下では、国粹主義が鼓吹され、教育界においても、外国語の排斥と、ポルトガル語使用が謳われるようになった。37年には、14歳以下の移民子弟の教育はポルトガル語でなされるべし、とする法令が発布され、38年12月には「小学校」の日本語部は、ブラジル連邦政府および州政府の通達に沿って、閉鎖に追い込まれている。さらに41年には日本語新聞や出版物も全面禁止に至り、数種類の邦字新聞と並んで『椰子樹』も発刊停止となっている。この間、日本政府・外務省には1940年にブラジルと日伯文化条約を締結しようとの動きもあった。藤村は1936年に、海外の児童生徒に日本語の児童文学や読み物を提供しようとの提案をなしているが、それ自体がブラジルの内政干渉となりかねないご時世を迎えていた。実際、一説では、藤村の発言が英訳で伝えられるや、外務省筋や現地在伯日本領事館側から牽制がなされるに至った、という<sup>5)</sup>。

日米開戦とともに、連合国側についていたブラジルは日本との国交を途絶し、日系移民の資産は凍結される。敗戦直後には、日本の戦勝を信じる「勝ち組」が、それをデマとして退ける「負け組」にたいしてテロ殺人を仕掛ける、いわゆる「臣道連盟」事件などが発生し、ブラジル議会では、あと一步で日系移民全ての国外追放が議決されかねない状況すら発生した。そうしたなかで日系資産凍結解除に尽力した人物として、鈴木悌一が知られる。弁護士としても鳴らした鈴木は、やがてサン・パウロ大学に日本研究所を設立し、初代所長を務める。鈴木は欧州の古典語やフランス文学に通じ、詩を多く諳んじていた<sup>6)</sup>。その鈴木教授は、日系の学生たちに、藤村の「椰子の実」を暗唱するようにと推奨した、と現地で教鞭を執る日系の教授から伺った。70年代のことであろうか。このように少なくとも、ブラジル日系人の2世、3世までの世代にとっては、「椰子の実」の歌詞とその旋律とは、日系人としての同胞意識の、ひとつの核をなしていた。だが、筆者が2008年にサン・パウロ大学の日本研究所で教えた折に、現在の第4世以下の院生諸君に尋ねたところでは、そのうち誰一人として「椰子の実」の歌を耳にしたことはない、との返答だった。

森幸一教授は、日系ブラジル人の教育環境がいかに編年的に変化したかを詳細に鳥瞰する社会学的研究を刊行している<sup>7)</sup>。それによれば、60年代には日本語への帰属意識が弱まり、70年代には、家族から日本語が消滅したのに対して、一種のマイノリティとしての主張の一環として、「権利としての日本」への回帰、80年代には、エスニック集団それ自体からの日本語の希薄化への代償として、「資源」として日本語を再認識する趨勢が窺えるという。はたして「椰子の実」の歌曲は、将来、日系ブラジル移民社会で、「少数派」の「文化的資源」として復権するのだろうか。

興味深かったのは、ブラジルで教鞭をとった機会を通じて、「椰子の実」の録音を聴いてもらって得た感想である。イデオロギー的に裁断すれば、国民歌謡たる「椰子の実」は、日本の国策遂行の手段として、その一端を担うプロパガンダ装置であり、晩年に『東方の門』執筆途上で逝去した島崎藤村は、21世紀の今日なお、北米の有力な或る藤村研究者から、戦争遂行の国策に貢献し、初の文化勲章を受章し、文学報国会のお先棒を担いだ、哀れな国粹主義者に他ならない、という糾弾を浴びせられている。ところが意外なことに、生まれて

初めて「椰子の実」を聞いた中華人民共和国や大韓民國の何人もの学者諸氏から、外交辞令ではなく、とてもよい音楽だ、との感想が漏らされた。

### 3. 国境を越えて<sup>こだま</sup>響る革命歌

思い出はおれを故郷に運ぶ  
 白頭の嶺を越え、落葉松の林を越え  
 蘆の根の黒く凍る沼のかなた  
 赤ちゃけた地肌に黒ずんだ小舎の続くところ  
 高麗雉子が谷に啼く威鏡の村よ  
 雪解けの小径を踏んで  
 チゲを背負い、枯れ葉を集めに  
 姉と登った裏山の檜林よ (中略)  
 おお  
 蔑まれ、不具にまで傷つけられた民族の誇りと  
 声なき無数の苦悩を載せる故国の土地!

戦前のブラジル移民は1937年以降、急速に落ち込む。その直接の原因は、ブラジル側の移民政策の変更にある。38年には、子弟への日本語教育の禁令の影響だろうか、帰国人口が移入人口を上回る、という事態が、一年限りだが発生している。だがこれ以降のブラジル移民激減の間接的背景としては、日本内地から大陸満洲への移民政策が強化された事情も関わっている。ブラジル側に残る証言には、日本軍部が満洲移民を促進するためにブラジル移民政策に横槍を入れた、といった風評も見られた。実際、33年から37年の5年間のブラジルへの日系移民は、年平均11,000人程度。対するに満洲國の日本人人口は、建国当時の32年には24万人程度と推計されており、これは同年までのブラジル移民ののべ総数と大差ない。だが、満洲國の日本人人口は、この後毎年平均5万人程度増加するようになり、とりわけ38年には1年間で一挙に10万人以上増加し、この年末には総計52万2千人を数えている(大連市などを含む関東洲の18万人余は含まない)。その直接の引き金となったのは、1936年、2.26事

件のあとに成立した廣田弘毅内閣が確定した、「百万戸」の満洲農民移民計画であり、その実施機関となったのが、満洲拓殖株式会社である。

この大移民計画の温床となったのが、偽「満洲國」建国であるが、その建国の切っ掛けとなった事件として、中国では現在も記憶に深く刻まれているのが「9.18」すなわち、1931年9月18日に勃発した「満洲事変」である。そしてその背後にも、満洲地域への移民問題があった。関東軍が、奉天・柳条湖付近の満鉄線を自ら爆破し、それを中国軍による攻撃と偽り、軍事行動を正当化したのが、満洲事変の発端である。この謀略を具体的に指導したのが石原莞爾参謀と、その作戦に同意した板垣征四郎高級参謀だったことは、よく知られる。だがさらにその前哨のひとつとしては、31年7月の万宝山事件がある。万宝山は長春郊外に位置し、現在では一見平和な、鄙びた農村に過ぎない。名称とは相違して高さ3メートルそこそこの丘陵の周囲に幅2メートルほどの水路が畝っているに過ぎない。だがこの水路の水利をめぐる、入植した朝鮮農民と中国側農民とが衝突した。朝鮮側の開墾農民の背後には、日本の武装警官隊が控えていた。いわば朝鮮農民に現地で紛擾を起こさせ、それを口実に朝鮮側の不満に捌け口を与え、同時に日本側の集団入植の先遣隊の役割も演じさせようという魂胆である。実際、韓国の新聞が中国の不法を詰るや、各地で中国人街が暴徒の襲撃にあい、平壤では200名近い中国人が惨殺されたという。

そもそも万宝山に朝鮮農民が移動してきた背後には、さらに遡る、1930年5月の「間島暴動」が控えていた。これは中国共産党の指導のもとで、間島の朝鮮独立運動派が貧農層を組織して、武装蜂起を起こしたものとされている。この暴動は中華民国官憲と日本側との双方から徹底的に弾圧されたが、そのために行き場を失った朝鮮人農民の一部が、万宝山での衝突の原因を為した流民の正体だった。この間島暴動に直接反応した長編の詩として知られるのが「間島パルチザンの歌」。作者の槇村浩は本名を吉田豊道という<sup>8)</sup>。当時19歳の彼は、高知の共産青年同盟のメンバーとして宣伝活動を担当し、反戦のガリ版刷りのビラや、「兵士の声」と題する新聞をつくり、朝倉歩兵第四四連隊の営庭に潜入して配布するなど地下生活をおくっていた。その代表作「間島パルチザンの歌」は1931年末にはすでに稿が成っており、1932（昭和7）年『プロレタリア文学』4月増刊号に発表されるや大反響を呼び起こした。これはあきらかに32

年3月1日の満洲國建国宣言に合わせて公表されたものだが、ただちに治安維持法により発禁となり、槇村は検挙される。

保田慶子氏による適切な要約をお借りするなら、『間島パルチザンの歌』は、日本の植民地支配下で朝鮮独立運動を戦った朝鮮パルチザンを謳い上げた、180行に及ぶ長詩である。闘いの中で父母を殺され、姉をうばわれた一少年が間島に逃れ、25歳の青年となって、銃を片手に見張りにつきながら、激しい抗日闘争の決意と、望郷の思いをこめてうたいあげるドラマでもある。「これほど深く朝鮮人の心と歴史にくい入り、しかも民族主義を乗り越えてインターナショナルイズムへの展望までを謳う槇村浩とは、いったい何者」か。「在日朝鮮人の誰かの筆名ではないかとさえいわれた」と、日本民主主義文学会鳥取支部の保田氏は回想を述べている<sup>9)</sup>。

ここまで倒叙法で遡って、ようやく間島の歴史的な特殊性を説明するところまで漕ぎ着けた。槇村の詩には、もうひとつの「3.1」も託されている。すなわち1919年3月1日の「万歳事件」として朝鮮全土をゆるがした独立運動蜂起の日以後、独立運動を闘った両班を始めとした人々は、日本官憲の弾圧をのがれ、国境を越え間島にたどりつき、やがてそこは独立運動を闘うパルチザンの根拠地となった。いま「国境」と言ったが、より正確には清朝末期よりこの方、この地方の帰属はきわめて不明確であり、李氏朝鮮と清朝の出先とのあいだでは、朝鮮系民衆の処遇を巡って紛争が絶えなかったことが、内藤湖南の長大なる文献精査「間島問題ニ関スル調査報告書」（1906）からも窺える<sup>10)</sup>。湖南の論文が書かれた1906年とは、日本が日露戦争以降、韓国に統監府を置いた段階である。逆にいえば、日本が韓半島の統治に関与した初期から、すでに間島問題は、清朝との係争点となっていた。同年、陸軍の齋藤季次郎中佐率いる工作部隊が、「韓国人民の生命財産保護」を名目に龍井に潜入し、清国側官憲と悶着を起こしつつも、ここに統監府派出所を設けている。民国成立以降の時期も、今度は民国政府と日本側出先とのあいだに軋轢が頻発している。そうしたなか、日韓併合後、10年と少しを経過して、ヴェルサイユ条約への不満も仲立ちに発生した1919年の「3.1.独立運動」。それに荷担してもはや故国に留まることができなくなった朝鮮・韓国の志士たちにとって、間島は絶好の潜伏地であり、それはやがて独立運動の温床となっていった。

だが1931年(昭和6)年12月、「戦旗」防衛講演会の講師として江口渙等とともに高知に赴いて、榎村浩の詩稿を知ることになる日本プロレタリア作家同盟の貴司山治も、間島について「朝鮮と満州の間の無人地区に蠢動する共産ゲリラ、あるいは不逞鮮人という商業新聞の記事以上のことはなにも知らなかった」と後述している、という。この「無人地帯」という認識は、当時の日本側の無知を見事なまでに露呈している。見渡す限りなだらかな大盆地が広がる現地は、農業開墾の先進地帯であればこそ、「不逞鮮人」の「巢窟」としても最適地に他ならなかった。だがそうした地政学的状況に、日本のプロレタリア作家たちは、あまりにも通じていなかった。それは満州開拓団の入植が現地の土地<sup>えんたつ</sup>篡奪に繋がることなど想像もできなかった、内地農民の無知にも釣り合う。だが龍井は、ハーグ密使事件の首謀者のひとり、李相<sup>イ・サンソル</sup>高(1871-1917)が瑞甸書塾を開いた土地であり、崔勇健から金日成にいたる抗日戦線の温床ともなっており、冒頭に引用した「龍井女子国民高等学校校歌」の下には、ざっと以上のような文化土壌が横たわっていたことになる。

このような経緯を踏まえたとき、はたして榎村浩の詩には、いかなる音楽表現を授けるのが相応しいのだろうか。木之下晃明監督により1978年には『人間の骨—榎村浩物語』(1978年)が映画化されている。あるいは2004年8月15日、韓国の韓国京仁放送の制作により、榎村浩と『間島パルチザンの歌』を紹介するドキュメント「平和主義者の肖像」が放映されている、という。こうした映像化に採用された楽曲の分析も、殖民と支配の20世紀を経験した日本の異文化理解を反省するうえで有効な企てとなることだろう。ここにも、異文化接触にまつわる「音楽表現学」のフィールドがある。

#### 【注】

- 1) 稲賀襄遺品。ワラ半紙にガリ版印刷。筆者蔵。『稲賀敬二遺文集 明日何方ぞ迷い猫』私家版、2003年、p.586に復刻。
- 2) その記録は、稲賀繁美「延辺地域における民族意識・その地政学的研究のための予備考察」中国、広東省、広州市、中山大学、国際検討会「近代東アジアにおける鍵概念：民族・国家・民族主義」での報告、2009年11月28日(刊行予定)。
- 3) 稲賀繁美 2009「ブエノスアイレスの雪舟、サンパウロの芭蕉：島崎藤村の国際ペンクラブ参加と「最も日本的なるもの」(1936)を巡る講演の周辺」『日本・ブラジル文化交

流』、国際日本文化研究センター、2009(非売品)、pp.111-126。英語版は“Between Asian Nationalism and Western Internationalism” Shimazaki Tôson’s Participation in the International PEN Club in Buenos Aires in 1936,” *The Proceedings of the East-Asian – South American Comparative Literature Workshop 2007*, Institute for International Understanding, Tezukayama Gakuin University, pp.57-71.

- 4) Meno Yuki, 2008 “Shimazaki Tôson and the Official Literature for Children in the 1930s and 40s,” *The Proceedings of the East Asian –South American Comparative Literature Workshop 2007*, Institute for International Understanding, Tezukayama Gakuin University, pp.73-79.
- 5) Michael K. Bourdaghs, *The Dawn That Never Comes*, New York: Columbia University Press, 2003. なお、本書は島崎藤村を国粹主義者として糾弾することを目的とした研究である。
- 6) 鈴木正威『鈴木梯一：ブラジル日系社会に生きた鬼才の生涯』サンパウロ、人文研究書、2007。
- 7) 森幸一「[和魂伯才論]から[伯魂和才論]へ：ブラジル日系社会における子弟教育観の変遷」『日本・ブラジル文化交流』、国際日本文化研究センター、2009(非売品)、pp.155-175.
- 8) 日本共産党筋の主張に従えば、この歌が再評価されたのは、1963年、蔵原惟人等によって『文化評論』に没後25周年を記念する特集が組まれてから、とされる。翌1964年『間島パルチザンの歌—榎村浩詩集—』が新日本出版社より出版された。
- 9) 保田慶子「情熱の詩人 榎村浩—26年の生涯—」『鳥取民報』2005年11月13日。
- 10) 藤田治策『白頭山定界碑』楽浪書院、1936。内藤湖南「間島問題—関スル調査報告書」(1906)は『内藤湖南全集』に収められている。
- 11) 龍井はまた、韓国・朝鮮で国民詩人として著名な尹東柱(1917-1945)の故郷でもある。その詩を暗唱していない国民が存在しない、という意味では、日本の宮澤賢治に匹敵する国民詩人といって語弊がない。その宮澤が属した國柱会にはまた、石原完爾も属していた。農民開拓の思想がそこには通底しているが、それが満洲開拓の夢と一体だったことも、見落とされてはなるまい。こうした野望を育んだ背景に流れていた音楽環境の復元も、また重要な課題である。一例に過ぎないが、『大閩兵』(1985)(監督・陳凱歌、脚本・高力力、撮影・張芸謀)の雰囲気を理解するには、幼少から思春期にかけて「八路軍」関係の軍歌を骨肉化している体験が不可欠だろう。